

## 5代目橘橋親柱 ～福島邦成の思いをつなぐ～

宮崎市街地のほぼ中央を東に貫流し日向灘へと注ぐ大淀川。

この大淀川には今では数多くの橋が架けられていますが、その中でも最も早く架橋されたのが、北岸の橘通りと南岸の中村通りをつなぐ橘橋です。ノーベル文学賞作家・川端康成が小説「たまゆら」の執筆のために大淀川河畔のホテルに滞在した際に、夕景の川面とこの橘橋の美しさに滞在を延長したという話も残っています。

大淀川と橘橋が織りなすこの風景は、宮崎市民のそれぞれの世代の思い出の中に、その時々で寄り添ってきたと言っても過言ではありません。この宮崎市街を代表する風景、その原風景の誕生は我が国最後の内戦である西南戦争の余韻がまだ残る明治13年のことでした。



夕景に浮かぶ6代目橘橋

### 福島邦成 架橋への思い

橘橋の南岸で代々医師を家業としてきた福島家に生まれ、後に第30代当主となるのが大淀川に初代橘橋を架橋する邦成でした。

邦成は向学の志高く、延岡藩の官費を得て17歳の時に大坂に出て古賀伺庵、緒方洪庵のもとで医学を学びました。その後、江戸に上り昌平坂学問所で学び、後年さらに研鑽を積むため京都でも学びます。このように、宮崎の地を離れて江戸、大坂の地で学び、都市文化を目の当たりにしながら過ごした時間は、後の邦成の行動に大きな影響を与えます。

一方で医師としての邦成は、宮崎の地で初となる牛痘接種を成功させるなど、新しい医学を積極的に取り入れ故郷の人々のために尽力します。宮崎医院の開業などにその動きが見られるほか、明治10年に起きた西南戦争後は宮崎出張警視病院の院長も務めています。

医師としての仕事に心血を注ぎながらも、西南戦争で疲弊した故郷を再興させたいという強い思いが邦成の

福島邦成略年譜

福島邦成略年譜		
1819	文政2	当時延岡藩であった宮崎郡太田村(現:宮崎市中村町西1丁目)で誕生
1836	天保7	延岡藩の官費で江戸で学ぶ
		古賀伺庵に入門し、さらに昌平坂学問所で学ぶ
1844	弘化元	延岡藩の官費で京都で学ぶ
1850	嘉永3	日向国延岡藩領内で初の牛痘接種
		宮崎郡太田村で西洋医学内外科を開業
1870	明治3	当時、清と呼ばれていた中国へ渡航
1871	明治4	宮崎で最初の医学所と宮崎医院(現善栖寺境内)を設立
1873	明治6	東京で学ぶ
1877	明治10	宮崎出張警視病院長を命ぜられる
1879	明治12	蒸気船日向丸を購入し、日向航路を開設
1880	明治13	私費を投じて初代となる橘橋を架ける
1887	明治17	私立橘病院開設
1898	明治31	永眠

心の中にはあったはずですが。他の地域との交易や人々が盛んに町中を往来する姿、それが邦成が思い描いた再興の姿だったのかもしれませんが。

そのような思いを押し量ることができることとして、西南戦争が終わった翌々年には、借金までして蒸気船を買い入れ「日向丸」と名付け、日向航路を開設し事業に乗り出します。そして、その翌年には度重なる願い出がようやく許されて、橋を架けるといって現代でも多大な労力と費用が必要となる架橋工事を成し遂げます。私費を投じて貫徹させた邦成の思いはその後も確実に受け継がれていきます。



初代橋橋

### 流失する橋橋

邦成が私費を投じ、ようやく架橋の夢が実現した初代橋橋でしたが、架橋からわずか5か月後には流失してしまいます。橋橋は初代から4代目までは木橋であったため、比較的短期間で架橋と流失による再架橋を繰り返しました。近現代の鉄筋コンクリート製の橋と異なり、橋脚の数が多くなる木橋という構造の特性上、水流による抵抗を受けやすいことがその一番大きな要因です。加えてほぼ人力で行う工事であったため、部材として使える木材の重量や寸法等にも制約が生じたことは想像に難くありません。

初代から4代目までの架橋と流失の時期は次のとおりです。

初代	明治13年 4月架橋	明治13年9月流失	
2代目	明治17年 6月架橋	明治19年9月流失	
3代目	架橋時期不明	明治21年6月流失	※2代目流失の直後か
4代目	明治21年12月架橋	昭和 2年8月流失	

### 5代目橋橋の誕生

第4代橋橋は台風接近に伴い県下を襲った暴風雨により、昭和2年8月11日、高松橋・赤江橋とともに流失しました。流失直前、古宇田知事(第21代官選)と消防組の幹部数人が橋橋の橋上で増水状況を視察しており、轟音とともに揺れ動きだした橋上を懸命に岸へと走り難を逃れた話も残っています。

4代目橋橋の流出直後から古宇田知事と大迫元繁市長(初代宮崎市長)はその復旧に尽力し、熊本工兵隊240名の出動を得て9月7日より仮橋の架設工事に着工しました。工事期間中には工兵2名が作業船の転覆事故で亡くなるという悲しい出来事もありましたが、9月20日には工事を完了し、同月29日には渡行式を挙げています。この間わずか14日、その驚異的な早さは宮崎市の中心部においてその南北を結ぶ橋橋の存在がいわゆる”日常”として市民に受け入れられていたからにほかなりません。

架橋と再架橋、仮橋の架橋という工事を幾度も繰り返してきた橋橋でしたが、ここにきて橋橋の永久橋化の検討が本格化します。そして第5代目橋橋の架橋構想の中で、ついにこの年に橋橋を永久橋とすることが決定します。



殉職した工兵のための鎮魂碑  
(場所:橋橋北詰から約300m下流)

工事は、昭和5年4月1日に着工、昭和7年4月30日に2年余の歳月を経てついに完成します。全長約360m、幅約17m、4本の親柱の四方には美しい橋の花のレリーフが刻み込まれていました。重厚な外観をもつ鉄筋コンクリート製のアーチ橋として完成した5代目は、6代目にその役目を譲るまで宮崎市のシンボリックな存在として昭和の時代を見つめ続けました。撤去の際には、多くの市民から寄せられた名残を惜しむ声を受け、橋の南北に設置されていた4本の親柱の内の1本が、大淀川河畔の橋公園に移設保存されました。



5代目橋橋

欄干の飾電燈に加え、親柱にも電燈が設置されていました。

右の写真は北詰から中村町方面を写したものです。人力車やボンネットバスと考えられる車両の往来する様子が、往時の姿を今に伝えています。

### 6代目橋橋 ～ 昭和・平成・令和 3つの時代をつなぎ、そして未来へ ～

昭和54年に開通し、今も私たちの生活を支えている6代目橋橋の架橋碑が、北詰の滞留スペースに設置されています。黒御影石製の碑の前面に刻まれた「橋橋」の二文字は、「宮崎観光の父」と呼ばれる岩切章太郎の揮毫によるものです。代を重ねて6代目になる橋橋ですが、実は架橋碑があるのは現行のこの6代目だけで、背面には明治、大正、昭和と続いてきた橋橋の歴史が下の碑文のとおり刻まれています。



6代目橋橋架橋碑

今、令和の時代にあって改めて「橋」という構造物を考えると、時代が変わってもその存在が私たちの生活にもたらし続けてきた恩恵は、今も少しも色褪せることはありません。

明治の世に福島邦成が思い描き、その強い意志で形となった橋橋。この先も私たちの生活を支え、日々の営みを静かに見守り続ける存在として今日もそこにあります。

橋橋の由来  
 古来 大淀川には橋がなく、兩岸を結ぶ交通は渡し舟に頼るほかなかった。最初に橋が架けられたのは明治六年のようである。地元の商人等の出資による賃取橋の架橋を許可した文書が県に残っているが、着工や落成等については何も伝わっていない。  
 初代の橋橋が、当時の宮崎郡太田村の医師福島邦成によって、現位置よりやや上流の上野町筋に架けられたのは明治十三年（一八八〇）四月である。邦成はかねて大淀川に橋の必要なることを力説し、再三当局に架橋を願い出て許可を得、私費を投じて有料の木橋を架け、自ら「橋橋」と命名したのである。  
 この初代橋橋は後に県に寄贈され、明治十七年（一八八四）に架け替えられ無料の二代目橋橋となった。そして同十九年と二十一年の洪水で二代目、三代目は流失した。その後、国道改修に伴い、明治二十一年（一八八八）十二月、四代目橋橋が現位置に架けられた。以後この木橋は三十九年の長い間人々に親しまれてきたが、昭和二年八月の洪水によって遂に流失した。  
 県は永久橋の必要を強く感じ、当時としては画期的な大事業として、二ヶ年の歳月と百万円余を費し、長さ三十八五米、幅十六米鉄筋コンクリートアーチ橋が昭和七年四月完成した。以来四十余年間 南北幹線のかなめとして、市の発展に寄与するところが大きく、またその重厚で優雅な姿は県民はもとより、宮崎を訪れる人々にも広く親しまれてきた。このゆかりのある橋（五代目）も近年の交通量の増加に伴い架け替えられることになり、その取りこわしに先立ち多数の市民が参加して「橋橋と名残を惜しむ集い」が催された。なお橋公園内に記念として旧橋の親柱が保存されています。

新橋の概要  
 橋長 三三九米  
 幅員 二八米  
 形式 六径間連続PC箱桁橋  
 工期 昭和四十七年六月～昭和五十四年七月  
 総事業費 約二十六億四千万円  
 昭和五十四年七月  
 建設省宮崎工事事務所

6代目橋橋の架橋碑に刻まれた碑文

= 参考文献 etc. =  
 ○ 『橋橋を架けた医師 福島邦成の生涯』 田代学 江南書房 1997  
 ○ 宮崎市制100周年記念事業 宮崎市フォトアーカイブ <https://photoarchive.city.miyazaki.miyazaki.jp/>

\* 本資料は福島良一氏、宮崎県立宮崎工業高校建築科の協力を得て作成しています。 \*

【資料作成：宮崎市教育委員会文化財課 令和7年3月】